

# 経田歴史ウォーク 海編

## ① 大寒仏の地蔵様

昔、この辺りに罪人を裁く代官所がありました。

ある日、行基という徳の高い坊様が通られたので、代官は「罪人が真人間になるにはどうすればよいか、お教えください」と請うと、「み仏にすがるしかないでしょう」と言って、彫ったのがこの大寒仏の地蔵様だと言われています。



## ② 論地

片貝川の流れが変わるたびに、経田地区と石田地区の境界についてたびたび論争が起こっていた地域です。ここでは、かつて経田小学校の学校林がありました。



## ③ 左右大臣

明治41年(1908)、滑川の堀内彫刻師を老人が訪ね、古代風立像の左大臣右大臣を作って欲しいと依頼しました。立像が出来た後、調べたところ老人が神様であったことが分かり奉迎祭をしたそうです。



## ④ 錨の溝 いかりのどぶ

### ■嵐の巻

昔々、船乗りたちが角の生えた海蛇を釣り上げ、おもしろがっていじめた。その後、坂の下の港に錨を下ろしたところ、綱が切れて錨が底深く沈んでしまった。そして、突然大きな龍が姿をあらわし、水煙を立て暴れ回り、船を沈めた。高波で海岸が崩れ落ち、港は砂で埋まった。そして、港は錨の龍が住む「錨の溝(どぶ)」と呼ばれるようになり、寂れてしまった。



### ■婚礼の巻

昔々、彦左衛門という大金持ちがいた。ある日、武士に姿を変えた龍が訪ねて来て、「私は錨の溝の主だ。愛本の主の娘と結婚するので、祝いに使う道具を貸してくれ」と頼んだ。

返ってきたお椀には米が三粒ついていた。汚いので捨てさせたところ、夢の中に溝の主が現れ「なぜ捨てた。尊い米を流したので貴方の財産は無くなるだろう」と言った。そして、六年程の間にそのようになった。



## ⑤ 仏ヶ浦

昔々、大同元年(806)のある日、能登から経田に来て漁師をしていた後藤光重の地引網に、黄金の観音仏の像がかかりました。光重は驚き喜んで、お堂を建てて祀り、朝夕漁に出かける前にお参りをしました。この観音様のあがった浜を仏ヶ浦と言います。観音仏は今、小川山千光寺の本尊になっています。



## ⑥ 慶屋殿仏 けやでんほとけ

昔々、坂の下に慶屋殿(けやでん)と呼ばれた身分の高い人が住んでいました。しかし、片貝川の大洪水で慶屋殿の広い屋敷や民家は川原になってしまいました。



## ⑦ 波珍坊と鼓が浦

常願寺はその昔「波珍坊」と呼ばれていました。天王寺を訪れていた源常寛が、信徒の勧めで建てた寺です。住んでみると、深夜に海中で鼓を打つような波の音がしました。そこで、音のする浜辺を「鼓が浦」、寺を「波珍坊」と名付けました。



## ⑧ コウナギ川

コウナギには神に仕えるという意味があります。天王寺が栄えていたころ、寺領から出る豊かな湧き水の流れをコウナギ川と名づけました。

また昔は水量が多かったので、舟運にも使われていたといわれています。



# 経田歴史ウォーク

